

札幌大学総合論叢 第一〇号 (二〇〇〇年一〇月)

〈創作〉

詩劇 『バラオン』

原子
修

(一)

世界中の光が闇の銃弾に撃ちぬかれて死ぬ

ひき裂かれていく女の絶叫が 青ざめた稲妻のふるえをはなつ
やがて暗黒の液をすするように幕があく

合唱団の はじめはほの白い曙光へのハミングがおこり やがて鋭い白昼の輝きへと 合唱の声がたちあがる

合唱団

「闇か……光か……宇宙の底は

太陽の口は肉をむさぼり

月の舌は骨をしゃぶり

罪ぶかく 大地は腐る

人よ……どこにいくのか

病める魂 抱きしめて

人よ……どこにいくのか

滅びの群れ」

合唱の終結部に管絃楽団のすすり泣きがかさなり それは やがて するどい絶望のポリフォニーを 世界の耳の祭壇にささげる

管絃楽団の演奏の中間部から孤光がめざめ 地を這う「飢えた母と子」のみじめな像を青じろくとらえる
孤光は次々に生まれ 飢えて這いずる老人や少年……男や娘の瀕死の姿を次々にとらえる

それらのあわれな孤光の群れをめぐって 群舞団がすばやく旋回し 飢え渴くひとびとのいたましい苦痛感を 骨のねじれ……肉のちぎれ……内臓のひからびによって 無残に造型する

群舞団の造型の終末部で管絃樂が消滅し 群唱団の重苦しい交声がわきおこる

群唱団

「なんとというむごたらしさか……飢餓の太陽は 一千万度の無慈悲な光で やせた母親の体中の水を奪い 絶望にうちひしがれた父親の胸から最後の鼓動を奪い……熱砂の上によこたわるひとびとのむくろに 死のコンドルが舞いおりる

おお……この世界に ひとびとの口の数にかなうパンの量は約束されている——というのに なぜ かくも多くのひとが 食べるべきパン……飲むべきスープを失って野たれ死ぬのか

(ひくく すばやく) 飢えたひとびとよ……気をつけるがいい 富んだひとびとの警察軍が豹の牙をうち鳴らしてやってくるぞ」

警察軍 肉食獣の声をあげ 手に手に必殺の鞭をふるってなだれこむ

群舞団 すばやく退潮……

貧しいひとびと……ある者は起きあがってのがれ去り ある者は 鞭うたれて倒れ ある者は踏みにじられて死に 地上はむごたらしい屠殺場にかわる

突然 すべての音が死に 世界の隅にすべての光が結集する

バナナ……パインナップル……パン……葡萄酒の瓶とグラス……純金にかがやく穀物の穂とあでやかに咲くアマリリスの花……それらの富のよるこばしい重量を満載して テーブルは 栄華の舟のように 文明の光の海にうかぶ

そのテーブルのかげで こぼれ散る葡萄の実を 白紅雀のように洗練された指でついでむ二十世纪の女王

ウーザ

ウーザ

「(暗れやかに笑い) われら富める者と彼ら貧しい者との間にひかれたあの不吉な飢餓線……それを越える者は死なねばならぬ……というのがこの世界の掟……だが この禁断の線をこえてきたひもじい蟲たちには わたしの忠実な警察軍がたっぷりと罰を与えてやるのだわ(たからかに笑う)」

光すら滅びた貧窮の地の底から 息たえだえの男が 必死の声をあげる

瀕死の男

「おお ウーザ……わたしの最後の訴えを ぜひと聞いてくれ」

警察軍 いっせいに鞭をふりあげて襲いかかるが ウーザ それをすばやく制する

ウーザ

「おやめ……警察軍 どうせ殺す蟲なら玉蟲色に輝くその背や 琥珀色にうごめくその手足が さいごのあがきで虚空を飾るのを見てあげましょう

さあ……わたしの忠実な警察軍よ その勇敢な男を ここに連れてくるがいい」

警察軍 やせおとろえた半裸の男の両手をひきずって ウーザの足もとにさらす

瀕死の男

「ありがとう……世界中のまばゆい富とかおりたかい食べものを そのすべらかな腕と腕のあいだに抱きしめて あでやかにほほえむ 今世紀の女王よ

だが ウーザ……この世界には わたしのような 食べものを失って 体がよわり やがてはみじめにも飢え死にしていく かぞえ切れないほど多くの男や女がいる……という事実をも忘れないでほしいのだ」

瀕死の男 ふと テーブルの上の食物の籠をみ おもわず 瀕死の身をもたげ 両手をのべる

瀕死の男

「おお パンだ……(目をつぶってかぐ)……命のかおりだ 救いだ ひとを絶望の底からひきずりあげる奇

蹟の縄梯子だ

おお 肉だ……おお 蜜だ……果物だ……魚だ……命をつなぎ 考えをたかめ 力をやしなってくれる 威
 厳の糧だ……尊厳のみなもとだ

(ウーザに向き 手をのべて) おお ウーザよ……この籠のたべ物を 今 赤ちゃんにのませるべき乳のな
 い母親にどうしてすぐわかないのか」

ウーザ

「貧しいくせに 富める者と同じ口をきく男よ 無知の冠をたかくふりかざし 貧困の宝石と飢餓の哲学に身
 を飾る愚かな蟲よ……蟲として生まれてきた者は蟲として死ぬのが正義というものではないか」

瀕死の男

「(テーブルに手をかけ 激しく) 蟲ではない……蟲ではない……ひとだ……人間だ……あなたと同じ人類だ
 ……兄弟だ……家族だ……同胞だ」

瀕死の男 籠の葡萄に手をふれようとするが ウーザの鞭 はげしくそれを打ちすえる

ウーザ

「さわるな……蛆蟲め われらの大切な食べ物に手をふれる時が おまえの死ぬ時なのだ」

しかし 瀕死の男 籠に手をかけ 葡萄の一粒をもぎとってほおぼり

瀕死の男

「おお 歯がふるえる……舌がとける……たべものというのは これほどまでに甘く 飢えの砂漠にふりしき
 るシャワーなのか」

ウーザ

「(兇暴に) 殺せ！ 殺せ！ 食べ物泥棒のけがれた心臓に わたしの怒りの銃弾を撃ちこんで 殺せ！」

銃声に背をつらぬかれて 男は手を籠から……そしてテーブルからはなし 地上で絶命

ウーザ

「(嫌悪感をあらわに) ああ けがらわしい 蟲けらが人間の姿形で死んでいる さあ わたしの忠実な警察軍よ 越えてはならない飢餓線をこえて わたしたちの庭に忍びこんだ このゴキブリ共の死骸を 一刻も早くかたづけしてしまっておくれ」

警察軍 飢えたるひとびとの死体を運び去り やがて沈黙

ウーザ ブランデーを注いだグラスを手に 世界の中心部へとすすむ

光がきらびやかによみがえり ほこらかに頭をかかげグラスを唇にすすって歩むウーザをほめそやす

ウーザ

「(ゆつたりと歩きまわり) 世界って何だろう……わたしって何かしら……」

そう……まちがいなく ユンベール……かつてわたしの夫であったあの男は 核兵器製造王として この殺りくの世に君臨できるたった一人の男だったのだわ

(突然虚空をみあげ) だが ある日 宏大な庭の芝生の上を 二人で散歩していた時 突然 空から 不気味な鳥の羽ばたきと鳴き声がかきこえてきた――

あの人はとっさに立ちどまり それから実際に宇宙からとんできた隕石のように口をつぐんでしまったのだわ

やがて ユンベールは とりすがるわたしの手をふりはらうと 澄み切った目でわたしをじっと見つめ それから 風のようにさわやかな声でわたしに言ったのだったわ……

「わしは鳥になるのだ」(ユンベールの声)

それから あの人は 世界最高の富と権力と名声のすべてをわたしに残したまま 美しい庭から おそろし

い暗黒のうずまく外へと出ていったのだった

ああ ユンベール……わたしの夫 彼がわたしとわたしの子宮のなかの子どもとを見すていった後 わたしの忠実な警察軍は 彼についての多くの情報をわたしにもたらしたのだったが それによると ユンベールは 彼が鳥としてこの庭をとびたつまでに犯したすべての罪をつぐなうため 飢えに苦しむひとびとの救済にすべてをささげている……ということだわ」

突然虚空をひき裂く鳥の羽ばたきと声

ウーザ 両手で顔をおおい襲いかかる恐怖感から身を守ろうとあがく

やがて鳥の声と羽ばたきが去り ウーザは苦し気に腹部をおさえ悶絶する

ウーザ

「だが わたしは殺さねばならない……このわたしの子宮の中でぬくぬくと育っているユンベールの子を……わたしを見棄て 否定し さげすむ男の子を どうしてわたしが苦しんで生む必要などあるうか——

そしてわたしのつくついているこの核兵器が 単に相手をおどす水牛の角ではなく 相手の心臓ふかく突き刺さる闘牛の角だった としたら それは まちがいなく これから生まれてくる者たちのうぶな心臓をねらっているのだわ

(衝動的に手のグラスを打ちくだき) やっぱり生むことはできないわ (焦燥感にかられてせわしなく歩きまわり) それやあ わたしだって女でもの 可愛い赤ちゃんが欲しいわ……キラキラと宝石のように輝く目……純金の光にたわむれる髪……わたしの血と肉とをもつて創造したかけがえのない命…… (はげしく首をふり 髪をかきむしって)

ああ でも 今の私は この残酷な文明世界の王……富める市民群のどん欲な顎に貧しい市民群をほうりこんでやる家畜飼育人……富める者同士を争わせ 彼らの闘いの絶頂でさく裂するであろう熱核兵器のうつく

しい薔薇に涙をながして感動する造園業者……そしてやがて絶滅していく ホモ・サピエンスという知能過多な生物種のおろかしい喜劇に悲劇の幕をおろさせようとしている史上最後の演出者……
ああ やつぱり 生むことは出来ないわ わたしの可愛い赤ちゃんを こんな残酷な世界に生みおとすことは とてもとても出来ないわ」

突然虚空をひき裂く鳥の声

ウーザを照らす孤光を除いて すべての光が減じる

声（スピーカーから若緑にもえる青年の声で）

「しめないで……おかあさん ほくの前に今ひらかれようとしているドアを 閉ざしてしまわないで……おかあさん」

ウーザ

「(虚空に手をのべ) だれ……だれよ……あなたは」

声（スピーカーから）

「ぼく……ぼくです……あなたの暗い羊水の海の底で 地上に生みだされる瞬間をじっと待ちのぞんでいる あなたの息子です」

ウーザ

「おお わたしの子……やがて生まれ落ちようとしているわたしの子……まだ氷っている大地のしたで一心に緑の蹄をといでいる小馬……(全身の期待をこめて宙をまさぐるが やがて力なくうなだれ髪をかきむしり) ああ でも 断目……断目……断目よ あなたを生んでやりたいけど……それはどうしてもできないのよ わたしのせいでやがておころうとしているむごたらしい核戦争の餌食に あなたをしてしまうことは このわたしにはできないのよ」

声（スピーカーから）

「（必死に）核戦争……もしそれが 地上に生をうけた人間として どうしても受けねばならない試練だ としたら それを 母であるあなたと 子であるぼくとなうのは当然じゃありませんか」

ウーザ

「（両手で耳をふさぎ）許しておくれ わたしの子ども……でも できない……できないのよ……今は わたしの最も憎むべき敵となったエンベールの子どもとしてあなたを生むことは 今のわたしには どうしてもできないのよ」

声（スピーカーから）

「ぼくを殺すつもり……おかあさん」

ウーザ

「（決然と頭をあげ）そう……殺すわ……殺すつもりよ……わたしのお腹の中のあなたを」

声（スピーカーから）

「（必死に）殺さないで……おかあさん」

ウーザ

「（むしろ冷静に）殺すわ……殺すわ……あなたを……わたしの子を……殺すわ」

ウーザ 耳をふさぎ 世界の裏側の暗黒へと駆け出し

ウーザ（絶叫して）

「殺さずにはおかないわ……わたしの子宮の中の わたしそのものである わたしの子を」

暗黒が世界のすべての形象を切断する

沈黙

遠くから殺されていく者の悲鳴がひびく 苦痛と悲哀を噛みしめる沈黙の顎

群唱団

「おお かわいそうに……人類というむごい樹木の枝に芽ぶこうとした よわよわしい蕾のような胎児よ

お前の朝露にぬれようとした緑の葉も 白昼の太陽の光をあびようとした真紅の花も……そして たそがれの風をはらもうとした重い果実も すべて かなえられざる夢となって今は消え去せたのか」

ウーザ 血まみれの両手をかけ 狂乱の目でかけこむ 孤光が青ざめてそれを追う

ウーザ

「(激しく息づかい勝ちほこって) 殺したわ……殺したわ……ウンベールの子を……この手で……わたしが……ひきむしって殺したわ(狂おしく笑う)(絶望して泣き) 許してちょうだい……わたしの赤ちゃん……たった四カ月……それもまっくらなわたしの子宮の中の熱くらしい海だけがあなたのすべての生涯だったなんて……(突然さつと髪をふりあげ 目を大きく見開き) でも すべての責任はウンベール……あの男にあるわ わたしに妊娠させておきながら突然身勝手な世界観にまどわされ 鳥となってわたしのもとから飛び去ったあの男が悪いんだわ(ふたたび泣きじゃくり) おお かわいそうな わが子……わたしのこの豊かに熟れた乳房から一滴の乳をすうこともせず殺されてしまうなんて……(両手をたかくさしあげ) これ……この……血まみれの手で……死の世界へと送りこまれてしまうなんて(絶叫し) おお罰しておくれ……この罪ぶかい母親を……」

(後ずさりし やがて 世界の背後へと消える)

ふたたび 暗黒のカオスがうず巻く

群唱団

「なんとおそろしいことか……富める者は貧しい者をしいたげてさらに肥えふとり……ついには 無力な赤ん

坊の親となることをすら拒絶してその子を殺し……生きるべき方向を失った人類は 今日も 太陽系の底を
はいずるばかり……」

鳥の声 いたましく空を裂き ついで ばさつという羽音がそれにつづく

群唱団

「おお 鳥だ……この世に生みだされる前にすでに殺されてしまった かわいそうなあの子の肉体から 魂が
ときはなたれて 鳥のつばさをかいうち 鳥の啼き声をはなちながら 空のきわみへと飛んでいく」

鳥の羽ばたき ひとときわ高くひびき やがて若々しい声をよびさます

声（スピーカーから）

「肉体をぬぎすてた魂は なんてかろやかなんだろう……時間でも空間でもない “永遠” の中をゆったりと飛
びまわるのはなんていい気持ちなんだろう」

群唱団

「だれだ……その声は」

声（スピーカーから）

「ほくだ……胎児のまま 母親のウーザによって殺された 不運な男だ」

群唱団

「おお かわいそうに……」

声（スピーカーから）

「やめてくれ……おれをあわれんで同情したりしないでくれ
それよりか 今のこのおれの “鳥” としての幸福をねたむがいいのだ」

群唱団

「肉体によりすぎる者は『死』の悲しみにやがて触れるが 魂を羽ばたく者は夜空の闇にまばたく永遠の星になる……というのは本当か」

声（スピーカーから）

「それは本当だ——しかし……」

群唱団

「不幸なのか……鳥であることが」

声（スピーカーから）

「幸福でありすぎるのだ……ああ 鳥ではなく人間として生きることができたら どんなにすばらしいことか」

群唱団

「なにを言いたいのか……」

声（スピーカーから）

「欲望の糸を地面にたらしめてみたいのだ……官能のかけを草むらにおとしてみたいのだ……」

群唱団

「つまり 人間として生きてみたい……とのぞむのか」

声（スピーカーから）

「ああ ぼくが もしウーザによって殺されずに ひとりの男の赤ちゃんとして 地上に生まれ落ちていたら どんな若者に生長して アスファルトの野を金属の鹿のように走り 鉄骨の丘を電気の兎のようにとび越えていたであろうか」

群唱団

「やめるがいい……今 お前のもつ鳥としての不滅の羽ばたきと不死の声をすてて 地上をはいずる罪のけものになろうとはのぞまぬがいい」

声（スピーカーから）

「（必死に）生きてみたいのだ……生きてみたいのだ……」

群唱団

「人間である……そのことがすでに罪である——としてでもか」

声（スピーカーから）

「（必死に）罪のうつくしさにこの手で触れさせてください 生きる……ということの甘い青酸加里をこの胃袋にながしこませてください」

群唱団

「かわいそうに……だが お前は 本当に 不滅の鳥であるよりは 蟲けらのように地をはいずる人間でありたい とのぞむのか」

声（スピーカーから）

「（必死に）のぞむのです……のぞむのです……」

群唱団

「宇宙をわがものとする魂の自由と栄光をよりは 宇宙のもっとも貧しいゴミの一粒にすぎない人間のほうをえらぶのか」

声（スピーカーから）

「（必死に）そうです……その方をえらぶのです」

群唱団

「よろしい……それほどまでに 悲しい欲望の火のもえ狂う地上での命をのぞむのであれば おまえのたつての希望はやがてかなえられ バラオンという名をもつ一人の若者として おまえは 罪の甘いかおりにむせぶ夏の草むらによみがえることになるであろう」

首を断ち切れようとする鳥のおそろしい声が空をひき裂く

空のたかみからまっすぐに落下してくる鳥の羽根のうなり……

蒼白く交錯する稲妻のクロス

群唱団が急速に旋回し おそれと不安のフォルムをはげしく造型する

暗黒の口がひらき 巨大な暴風雨が群唱団へと襲いかかり やがて世界のすべてを そのくらい胃袋にす

すりこむ

雷鳴の破壊力……疾風の圧……どよめく闇の重量……

やがてじよじよにしずまり 沈黙の湾があらわれる

合唱団のハミングと管絃楽団のいぶき はじめはチモシーの葉にそよぐ微風のように……やがて高潮し

白樺の梢をゆさぶる疾風となる

それにあわせて かすかな光が地平線から萌えそめ やがて世界全体を ういういしい逆光のキャンバス

に焼きつける

合唱団

「光る髪……

熱い唇……

甘い息……

バラオンよ

美しく お前はうち伏す

夏草しげる

世界の

庭に」

光は完全に虚空をつかみ 地に伏すバラオンをみつめる

危険な蜂が妖しいトリルを風にうち 背理の蝶が鮮やかな疑問符を宙につづる

ウーザ ユーロンと腕をくんであらわれる

ウーザ

「そうね わたしの愛するユーロン まさに天の助けだわ

地球の極がはげしく冷え 高みをわたる風が乱れて 今まで暑かったところには大寒波をおくり 今まで寒

かったところには干ばつをおくり 所々にすさまじい集中豪雨をどしゃ降らしている

冷害と干ばつと水害のおそろしい試練が 今 貧しい者たちを餓えと渇きの苦しみにおとし入れ 富める者

たちにも不安の影を投げています

そして 幸いなことに 同じ富める者たちの中でも ユーロン あなたのところは天のむごい仕打ちを受け

ずにするでいるけれど あなたのライバルであるあのコミーネンのところは ひどい干ばつで 大地がひび

割れ 穀物は枯れ 水はかわきあがって ひとびとは食べるパンの量をへらしたり 肉のかわりに魚を食べ

たりしている

コミーネンがやがてわたし達のところに来て パンと肉と水を売ってくれと頼みこむのは時間の問題

だわ」

ユーロン（ひざまずき 手に接吻して）

「おお ウーザ わたしのサファイア……わたしの真珠よ……」

あなたはなんて賢明なんだろう——それで あの権力好きなコミーネンをとちめる絶好のチャンスは今あなたとわたしがつかんだのだ……と あなたはおっしゃりたいのですな」

ウーザ

「察しがいいのね ユーロン……つまり あなたは このチャンスを完全に利用して まず あなたのパンと肉と水を倉庫にしまつて鉄の錠をぴーんとかけ ついでそのまわりに 核兵器で武装した兵士達を配置して コミーネンに対する絶対的な優位をささげねばならないのよ」

ユーロン

「(たからかに笑い) いいですとも ウーザ あなたの言う通りにしますよ そればかりか あなたからもつともつと核兵器を買つてコミーネンにそなえることにしますよ」

ウーザ

「(ユーロンを抱きしめ) おお 愛するユーロン あなたが好きよ」

ユーロン

「(昂奮して) ウーザ なんてわたしは幸福なんだろう……あなたとわたしが愛しあっている限り あの無知と野望がご自まんのコミーネンなどすこしもおそれる必要がないのです

おお 美しい人……わたしはあなたの手をとつて 宇宙の底をただようベッドにあなたをご案内せずにはおきませんよ」

ウーザ

「(ユーロンの首に手をまわし) わたしの肉体をつけ狙う泥棒烏にしては 上手な台詞ね」
ユーロン

「(ウーザを抱きしめ) さあ 行きましょう……あなたとわたしが抱きあうことによつてつくられる最後の王国へ……」

ウーザ

「(うつとりと) そうね……血まみれの薔薇が咲くまでには まだ接吻と抱擁のための甘い時間がすこしは残されている……という訳ね」

ユーロン ウーザに接吻しようとするが 一方 ウーザはユーロンの肩ごしに 横たわるバラオンを発見し ユーロンを激しくおしのけ 首をめぐらしてバラオンを凝視する

ウーザ 両手をさしのべ バラオンへとにじり寄る

やにわにバラオンにかけより ひざまずきバラオンの肩をさすり髪にふれ

ウーザ

「おお この肩のわかわかしい丘陵……この髪のみずみずしい森……」

ウーザ バラオンの耳から唇へとやわらかい指のカーブをふれ

ウーザ

「なんて熱いのでしょう……この耳 まるで 太陽のかまどで焼かれたばかりのパンのよう……」

そして 香しいこの息づきは まるで エデンの園から吹いてくる風のようなだわ」

ウーザ 突然立ちあがり 化石のように立ちすくむユーロンにむかつて

ウーザ

「帰つて ユーロン……ここは わたしの庭で 今わたしにはなすべきことがあるのです」

ユーロン 怒りの火を肋骨のかけで音たかく燃やして去る

ウーザ バラオンのかたわらに戻り 顎に両手をすべらせ 顔を抱く

ウーザ

「なんて気高い光のせせらぐ鼻……頬にはむらがる血のさざめきをうかべ つぶられた臉に宇宙の闇のまろやかさをかなでて すばらしい若者」

ウーザ バラオンの上半身を抱きおこし 接吻しようとする

秘書が急速にあらわれる

秘書

「コミーネン様がおいでになっていらつしやいます いかが致しましょうか」

ウーザ すばやく起き上がり 威厳をとりつくろろう

ウーザ

「むこうで会うわ」

秘書

「かしこまりました」

秘書一礼して退く

ウーザ 地に伏すバラオンを気づかうのあまり 秘書の後を追いかけて ふたたびふりむく

ウーザ

「(いたずらそうに目を輝かし) そうだわ……あの 種馬のように単純な脳ずいと肉牛のように鈍重な精神の コミーネンが 発情した犬のようにわたしに求婚してくるようにしむけてやるわ そしてコミーネンの あの ヨークシャ豚のような耳にユーロンについての悪口を毒薬のように流しこんでやるわ その結果ふたたびがますますいみじい やがてはおたがいの心臓に牙をつきたてあう二頭の狼のようにしてやるわ」

ウーザ 消え去り 世界に暗黒がまいる

合唱団のひそかなハミングにつれて 微光の青ざめた輪が 地に伏すバラオンをとらえ やがてその光は
じよじよにまばゆさを増す

合唱団

合唱団の歌声のたかまりにあわせてバラオンがめざめ 非常にかすかな速度で起き上がっていく

「めざめよ……バラオン

罪の庭に

わざわいの太陽の手をのべて

黄金の苦しみ

飲みほせよ

生きよ……バラオン

時は 今

汝のグラスにあふれたり」

バラオン 白樺の若木のように光を浴びて立つ

バラオン

「(手を空にかざし) これが 空という物質か……なんとやわらかく 透明で 人間の氷のような意志とか火
のような感情と同じ性質をもっているのか

(手で宙をかきませ) これが 風という動物か……まるでゴムのような筋肉と稲妻のような神経をもち 地
球にはびこるカビを食べて生きているのだな

(手で自分の体をふれまわり) ふん これが 人間という名のクエッションマークか……みごとにねじれて
いて どんな返答にも応じきれないほど 愚劣で厳しゆくだな

(ふたたび 手を空にかざし) それにしても おれという名の煙がきな臭く立ちのぼるこの空は 数十億年

の間一度も電気掃除機でなめまわしたことの無い洞穴のようにごみごみしていてうす暗い

さあ いいか……パラオン お前も ヒトというもつとも悪質なイキモノのかたわれとなったからには お

前をなぶり殺した母親のウーザに たつぷりと応分の報酬を支払ってやらなくちゃいかん

みずからだけを愛する者は やがてみずからを滅ぼす者である……という単純な方程式のハンマーで あの

女の脳天をぶち割ってやらねばならん

(激しく絶叫する) 空よ……もしお前の青い目にかぶさる臉があるのなら 今 その重いブラインドをおろ

すがいい 太陽よ……もしお前の金色の城をひらく扉があるのなら 今 それを閉じてしまおうがいい

(立ちどまり 冷静に) でないとしたら……そうだ……おれのこれからしでかす残忍なおこないのすべて

は おれの責任ではなく 空よ……太陽よ……それは すべて お前たちの責任になるのだ」

パラオンの毒薬的なモノローグの終末部に 遠方からの市民群のさわがしい声がかさなり やがて 追わ

れて逃げるひとびとのおびえた群れがなだれこんでくる

群唱団

「おお ユンベールだ ウーザの警察軍に追われたユンベールが その信奉者たちといっしょに こっちにや
つてくるぞ」

その中心で 粗衣に身をつつむユンベールがまどい動く信奉者の群れを制し やがて 円環状に坐らせる

ユンベール

「さあ ここに坐るがいい われらを羊のように追いたてたあの警察軍も ここまでは追ってこまい」

男1

「(無残にうち砕かれた一方の腕をさすり) それにしても残忍なウーザ 彼女の命令によって動く警察軍

が これこの通り わたしの腕を 鉄よりも堅くて重い棒でうち砕いたのです」

ウンベール

「(その腕に手をおき) なんて崇高なのか……あなたの苦痛は しかし どんな野蛮なウーザの警察軍も あなたの 飢えているひとびとに対する隣人愛をうち砕くことはできないであろう」

女1

「(血まみれの脚をさし) ごらんなさい ユンベール 人でなしの女支配者ウーザが 彼女の警察軍の銃の台尻をかりて傷つけた この脚の傷を

どうして あの女は これほどまでに たがいに愛し合おうとする隣人の群れを憎むのでしょうか」

ウンベール

「(その脚に手をふれ) 愛のない者の目には 愛をもつ者は おぞましくも妬ましい富者として映るのだが、あなたの愛はなんと気だかく不屈なのか

さあ 兄弟たち……このはてしなくひろがる空のした……空腹にあえぐひとびとのひび割れた口へと わたしたちの隣人愛の火によって焼かれたパンを届けに さあ 出発しようではないか

わたしたちが一秒間ためらっている間にも 飢えて死ぬ隣人がまたひとりふえるのだ」

ウンベールと信奉者たち 立ちあがる

バラオン 嘲弄的に近づく

バラオン

「(ウンベールに) 不敵のみえざる冠で頭を美々しくかざり 胸のかまどにごう慢の火をかくした男よ ちょっと待つがいい」

ウンベール

「(じつとバラオンをみつめ 微笑して) わたしか……わたしの名をたずねているのか 若いかた」
バラオン

「そうだ……」

ウンベール

「ウンベール……これが わたしの名だ」

バラオン

「ふん ユンベールか……天の草むらからはじけた一匹の蚤が 今地球のうえを びよんびよんとびはねて
は ところどころで地球の大切な血をチュツと吸い盗んでいる……というたぐいの名前だな」

男2

「(怒りに身を震わし) 黙れ 無礼な奴 そういうお前こそ 一体どこのどいつだ」

バラオン

「(嘲弄的に) おれか……おれの名はバラオン……するどい棘を体中にうえこんで近よってくる者を一瞬のう
ちに刺し殺す茨の男だ」

男3

「(猛禽のようにたけだけしく) それでは 貴様も あの非人ウーザの手下か」
バラオン

「ウーザ……なんだい それは そいつはどんな無残な牙をもつ鯨なのだ」

女2

「お黙り 悪者奴 うそぶいたって ちゃんとわたしたちにはわかっているんだから」
ウンベール

「(バラオンをとりひしごうとする信奉者たちを制し) やめなさい……この若者の目をよくみるがいい 狂犬のようにわめく口に反し 目は寶石のように澄んでいる(バラオンに) お若い人……そう バラオンといつたな わたしの目をじっとみなさい……あなたの毒々しい言葉のかけに ふしぎにきよらかな魂がせせらいでいるのがわたしの目に映っているであろう」

バラオン

「黙れ 黙れ 予言者気取りで 狼の灰色の毛の上に紅雀のきらびやかな羽根をまとい 虚栄心と名声欲の火をしっかと抱きしめる怪物奴」

ウンベール

「天よ……この みずからの心に叛く不幸な若者に 許しといたわりが 今ありますように(バラオンに) そうだ……あなたの質問にこたえよう バラオン

ウーザとは かつてはわたしの妻……今は この世界の事実上の支配者で富める秃鷹どものうえに君臨し ありあまるパンとつめたい核兵器にうずもれてくらす女だ

ああ ウーザ……心貧しいこの女の上にも 魂の救いがありますように」

バラオン

「(嘲笑して) ふん 口先だけの偽善者奴(スピーカーから) だが ウーザを妻としていた男とは つまり ……」

群唱団

「バラオンよ……冷静になるがいい ウーザを妻としていた男とは つまり ウーザの夫」

バラオン

「(スピーカーから) その通り……つまり……ウーザとウンベールは夫婦であった……そして……」

群唱団

「そして バラオン……お前がウーザの実の子である——ということは 同時に お前がウンベールの実の子でもある——ということだ」

バラオン

「(スピーカーから) つまり ウーザがおれの実の母である……ということは同時に ユンベールがおれの実の父である ということなんだ (笑つて) なんてにぎやかな運命の交叉点だろうか (口調をかえ) だが 無力な胎児のおれをウーザのおなかの中に残したまま逐電してしまったこの男にも おれのおそろしい裁きがかくならずにはすむまいて——

(ウンベールに) ところで ユンベール おしえてやろうか……お前の本性を

泥棒猫だ!……貴様は

富んだ連中が汗水たらして焼いたおいしいそうなパンを お前はお上品な理屈をつけては手入らずで盗みだし そいつを怠け者でぐうたらな飢えた連中にただで投げあたえようとしているのだ……さもさも自分が苦労してつくったパンであるかのようなしたり顔で

泥棒猫だ!……貴様は」

ウンベールの信奉者たち いっせいにバラオンをとりまき 拳をかためて打ちかかろうとする

ウンベール

「(いきりたつ信奉者を制し) やめなさい 今ここで あなた達が本当になさなければならぬこと……それは祈りだ 祈ることだ

さあ拳をほどこき 両の手を組んで祈ろうではないか

この不しあわせな青年の魂にひびくように祈ろうではないか

この青年の内部ふかく眠っているあわれみの心を われらの祈りの拳でノックし 祈りの手でひらこうではないか

それ以外のことを今のわたし達は許されてはいないのだ」

信奉者たち ユンベールの力づよい声にうなだれ やがて頭をたれ ユンベールをとりまいて祈る
ユンベールとその信奉者たち

「世界中の食べものと地の恵みを 世界中の兄弟がわかちあうようにつとめさせてください
今日飢えている兄弟を今日飢えていない兄弟がすくうようにつとめさせてください

今日文字を知らない兄弟を今日文字を知っている兄弟がすくうようにつとめさせてください
いたずらに生みすてず ひとりひとり価値ある人生を歩むものにしてください

すんだ空ときよらかな水と緑の大地を守るものにしてください
金銭におぼれず 心のみちたりをもって富となすものにしてください

殺りくの武器によらず 心の平和をもって力となすものにしてください

一生涯謙虚に学ぶものにしてください

世界中の 今日困っている兄弟をたすけることよって愛と永遠の命を得るものにしてください
かしこい自己犠牲……かしこい自己犠牲こそ愛である——とみずから証すものにしてください」

この祈りの途中から群唱団も加わり 宙を圧する壮大な交声曲を構築する

群唱団

「(あわてて) 大変だ 警察軍だ……ウーザの犬どもが 獣の牙をむきだして襲ってくるぞ」

ウーザの警察軍 銃 棒 鞭をふるい肉食獣の濁った声をあげて襲いかかる

信奉者たちはユンベールをかばって逃げまどう

バラオン 本能的にウーザの警察軍にむきなおり 狂声をあげて挑みかかり 戦う
警察軍 バラオンをとりかこみ はげしく炸裂する花火のようなバラオンを集中攻撃し抵抗するバラオン
をついに取りひしく

その間にウンベールとその一団はかろうじて逃げおおせる

バラオン

「(とりおさえられた四肢を絶望的にばたつかせ) さわるな ふしだらな豚共奴」

警察軍沈黙のまま バラオンを縄でしばりあげ垂直に立たせる

ウーザ出現

ウーザ バラオンを発見し 驚きの電気にうたれて一瞬たちすくむが やがて両手をひろげて走りよる

ウーザ

「(バラオンを抱きしめ) おお かわいそうに……わたしの恋人 荒縄がその熱い腕……燃える胸にくいこんで ああ なんて不しあわせな目に あなたは今あっているのでしょうか」

警察軍のリーダー

「ウーザ様 この男は 叛逆者ウンベールと共に富めるわれらへの呪いをくちばしり はては 飢餓線をこえて 飢えたる者たちの方へと逃亡をくわだてたのでございます」

ウーザ

「(笑って) それで どうして この青年だけが 今ここにこうしてしまわれているの」

警察軍のリーダー

「この男ひとりだけが 激怒の髪をライオンのようにふり乱し もっとも勇敢な者のもつ激しい目を見ひらいて 素手のまま 重武装のわれわれに挑みかかってきたのでございます」

ウーザ

「そして この青年がたったひとりであな達を相手に捨身の闘いをくりひろげている間に あの卑怯者のウンベールとその一味がまんまと逃げ去ってしまった……という訳ね

(突然きびしい命令口調で) 愚か者奴 おまえ達は 縛るべきであった卑怯者をいともやすやすとのがしてしまいい そのかわりに 縛るべきではない勇者に縄をかけているではないか

さあ 今すぐ 彼を釈放しなさい」

警察軍のリーダー

「えっ この手負い熊よりも危険な男を 今 ここですぐ釈放する というのですか」

ウーザ

(「残忍に」これはむしろ 捕えるべきであった者をのがし 捕えるべきではなかった者をいましめているお前たちへの 無残なこらしめをまぬかれさせるための命令なのだがね……)

警察軍のリーダー

(「蒼白になり 威儀を正して) ははっ ウーザ様 すぐ釈放いたします

(警察軍に) その男を すぐ 釈放せよ」

警察軍

「はっ」

バラオン 縄をとかれて自由になる

ウーザ

(「警察軍にヒステリックに) さあ わたしの忠実な警察軍……こんなところにテレビアンテナのように 立つていないで ユンベールを追っかけて走りだしなさい それがおまえ達の罪をつぐなうたった一つの

道なんだから……」

警察軍 拳手の札をして走り去る

バラオン

「(手や体をさすりつつ) ああ ひどい目にあつた(ウーザに) だが あんたはなんで おれのような 人食
い熊よりも危険な男を 動物園の檻から出して自由にしてやるんだい もしかしたら おれは 次の瞬間に
も 牙をむいて躍りかかり お前のやわらかい肉に爪をたてて引き裂き 真紅の血がほとばしる首筋に口を
あててそれを飲みほすかもしれないんだぜ」

ウーザ

「(うつとりとバラオンに寄りそい) 小牛ちゃん……ほんとうに可愛い小牛ちゃんだわ……あなたは
バラオン

「ふん お生憎さま……小牛のやわらかい肉を食べようたって そう簡単にいくかどうか それどころか ひ
よっとしたらあんたの方が おれのぴかぴか光る角をどてっ腹に食べるってことになるかもしれないぞ」

ウーザ

「ああ この小牛の吠え声が またなんともいえず可愛いわ」

バラオン

「小牛じゃあない……バラオンだ」

ウーザ

「バラオン……これが あなたの名？」

バラオン

「そう……ちょうど あんたの名がウーザで あんたのかつての夫の名がエンペールであるように おれの名

はバラオンさ」

ウーザ

「(バラオンの手を取り じつとのぞきこみ) バラオン……いい名だわ

(バラオンの手をとって目の高さにかざし) おお かわいいそうに……去勢された馬のように愚鈍なわたしの警察軍が 大切なあなたの手首に屈辱の縄目をきざみつけるなんて

ねえバラオン……罪もないあなたが訳もなくしいたげられるのを見ているよりは ippsoわたし自身が高圧電池のうなり狂う電気椅子にふかぶかと身を沈めた方がましだわ」

バラオン

「(スピーカーから) うつくしい唇ほど嘘いつわりの言葉を吐く……というのは本当だな

このおれを まだ手のひらにのるぐらいのちっばけな胎児のうちになぶり殺してしまった極悪人のくせに 今は 聖母マリアもつい臉をふせてしまうほどのいつくしみ深さをふりまく

ああ 女……おのれの罪業を忘れることにかけての天才よ

これらの数十億のうつくしい下等動物がやがてこの地球をむさぼりつくしてしまう日がきつとやってくるぞ」

ウーザ

「(バラオンの手をとってテーブルへといざないつつ) さあ バラオン……わたしの恋人よ こちらにどうぞ

……ブランデーを飲みましょうよ」

ウーザ ブランデーグラスに酒を注ぐ

ウーザ

「(バラオンにグラスを渡し みずからもグラスを唇にあてて) さあ 乾盃しましょう……もはや 二度とあ

あなたが あのお調子者のウンベールの口車に乗って 禁断の飢餓線をこえ あばら骨をぜいぜいいわしているやせ犬どもの群れに近づこうなどとは考えないことをねがって——」

バラオン

「(乾盃にこたえ) 禁断の飢餓線がやがて立ちあがって 怒りたける狼の姿をあらわし ついにはあなたの首にがぶりと噛みつく日の一日も早からんことをねがって乾盃……」

ウーザ

「バラオン……あなたの目はほんとうにすばらしいわ

にがい苦悩のかけが悲しみでいっぱいの水鳥のようにしのんでいて どこからか黄昏の光がこぼれ落ちてくるのよ」

バラオン

「(グラスをあおった後で) だが どうして あんたは おれに こんなにも深切なのかね」

ウーザ

「(バラオンにひしと寄りそい) だが どうしてあなたは わたしをこんなにも狂わせるの」

バラオン

「(ウーザを腕に抱き) それは あんたの目がコロンビアの谷底からほりだされたエメラルドよりもっと神秘的だからさ

(ウーザの髪・額・耳・鼻と順になで) この髪はどんな黒曜石をほどこいたつくったせせらぎなんだい……この額で息たえたアフリカ象はどんな象牙をここにうずめていったのか……耳にとび交う中国の鳥たちは今どんな求愛のセレナーデをつぶやいているんだ

(バラオン ウーザの唇に彼の唇を危険なほど近づける)」

ウーザ

「(あえぎつつ) ああ 恋は宇宙のてっぺんから吹きおろるおそろしい風のようにだわ」

バラオン

「(ウーザを激しく抱きしめ) 罪ぶかいあこや貝よ……男という一枚の貝殻と女というもう一枚の貝殻を重ねあわせてはじめてなまぐさい肉の奥底に『愛』という名の真珠をうみだすことができる罪つくりの貝よ
 そのように おれたちも『愛』という真珠を手に入れるためには このようにして唇と唇を貝殻のように重ねあわせなければならないのだ」

バラオンとウーザ 化学反応する水素と酸素のように抱きあつて接吻する

光が急速に滅び スポットがふたりを照射する

群唱団

「バラオンよ……愛しはじめたのだな お前の実の母ウーザを

しかし バラオン……男が女を愛するようではなく 息子が母を愛するようになりウーザを愛しなさい

親と子の愛は凶暴な核エネルギーをたくみにおさえて小出しにする核融合反応炉のように平和的だが 男と女の恋は一きよにすさまじい熱と光をはなつことによつてまわりのすべて……アスファルトや鉄までもとくしてしまう熱核兵器となるのだ」

バラオン (スピーカーから)

「(絶叫して) おお 落ちていく……落ちていく……欲情の火に大切なつばさを焼き切られた鳥が へどので
 そうな悪臭のかたまりとなつて 地上にうずたかく積まれた女の肉とはらわたと脂肪のかたまりへと落ちて
 いく ああああ……」

光 じよじよに明察の世界にかえる

抱き合つたままのバラオンとウーザ

ウーザ

「(うっとり)とねえ バラオン……結婚しましょうよ」

バラオン

「女の腐つてどろどろ溶けだした肉と 男の邪悪にねじれた骨とを 結婚という名のスープ鍋でぐつぐつ煮たてて 悪臭ふんぶんなるコンソメスープをつくりだそうって訳か

ふん……今世紀最悪の料理人奴

おまけに その憎悪の熱い泡をたてるスープを 世界中の肉食人種どもの口にそそぎこみ おれとあんたが夫婦である……ということのやけつくような意味をたつぷりと味わせようというのだな

ふん……こいつは面白そうだぞ……気持ちがいいみた干ばつの太陽を飢えてひもじい奴らのうえにつり下げて 彼らもだえ死ぬ様子をじっくりと観察しようか

それとも 冷酷きわまる月を富める奴らの背に近づけて 彼らがますます虚ろなたかぶりに酔う様をたつぷりと拝見しようか そして……そして……そうだ ひよつとして 退屈になったら 核兵器でデコレーションケーキを世界のテーブルに飾り うさ晴らしにマッチで点火したっていい訳だな

その結果 ひよつとして 六十億の肉食人種どもが 地球史上空前のまばゆい光のきらめきの底にとけ去つた——としても ねえ ウーザ それだって おれとあんたのみだらな結婚の引き出物にはいかにもふさわしいショーといわねばなるまいさ」

ウーザ

「(バラオンに接吻し)すばらしいわ バラオン……でも あなたが わたしのもつ世界支配者としてのすべての権力を わたしの夫としてひきつぐためには ぜひと今すぐになしとげねばならないことがある

わ

バラオン

「なんだと 自分でもちだした結婚に 今度は自分で条件をつけて、自分」という商品についた値段を自分が
つり上げようって寸法か……」

ウーザ

「(バラオンに接吻し その後でじつとバラオンをみつめ) ユンベールを殺してほしいの」

バラオン

「(一瞬おどろき) えっ あんたのかつての夫ユンベールを殺してくれ というのか——このおれに」

ウーザ

「そう……かつてわたしの夫であったが故に 今のわたしのことをもつともよく知り やがて得ようとしてい
るわたしの幸福をどうしたらさげすむことができるか を一番わきまえている おそろしい敵ユンベール
……」

彼こそは わたしとあなたの結婚についての悪口を世界中にいいふらす もつとも危険な人物なのよ」

群唱団

「おお バラオン……かつて人類がうみおとしたなかでの最悪の男——」

お前は本当に実の父ユンベールを殺し 実の母ウーザと結婚しようとしているのか」

バラオン (スピーカーから)

「そうだ……おれは本当にユンベールを殺し 母ウーザと結婚しようとしているのだ」

群唱団

「なぜだ……なぜ それほどまでに お前の実の両親を憎むのか——バラオンよ」

バラオン（スピーカーから）

「（涙声で）ウーザのくらい子宮の中におれをおきざりにした無慈悲なウンベールを殺すのがもし罪だ……と
したら——また 子宮の中でかすかな……だがすこやかな鼓動をかなでいたおれを 殺意にもえる手でひ
きずりだし むごたらしくもなぶり殺したウーザに復讐するのがもし悪だ……としたら おれは『罪』と
『悪』によって成立している この上なく悲しい存在なんだ（泣く）」

群唱団

「（沈痛に）むごたらしいかな……人類」

バラオン

「（ウーザを抱きあげ）よし ウーザ……ウンベールを殺し その後で 地球上の最後の暴君としてのバラオ
ンの 血にまみれた戴冠式を あんたといっしょにあげることにしよう」

バラオン ウーザをおろし 熱帯的にもえる接吻をかわして 敏捷に去る

ウーザ

「（うっとり酔うように）バラオン……バラオン……いい名だわ まるで わたし自身の名であるかのよう
に バラオン……このよび名は わたしをとらえてはなさないわ（地上をせわしく歩きまわり）ねえ バ
ラオン……どうして わたしは こんなにもあなたにひかれるのかしら 魂を奪われるのかしら……（狂お
しく笑う）ねえ この風——まるであなたの頬そっくりにわたしの頬にすりよってくるわ（胸をみずからの
腕で抱き）この胸のなかで数千万の熱い血潮のささやきにうずまっている心臓は あなたの甘い言葉がでた
りはいったりする小さな城のようだわ（地上から一輪のバラをつみ）そして……この薔薇はまるつきり バ
ラオン……あなたの おいしいおいしい唇のようだわ（踊りだし）ああ 恋……わたしの体中の水素を活気
づけ 酸素をむちうち アルゴンを狂った鳥のように走らせる命の調教師よ（跳躍し）ああ 今こそ わた

しは 全宇宙でもっともキラキラと光をはなっている物体なんだわ ほめたたえるトランペット……君臨する玉髓……よるこびの肉と走る骨……火と水のかおりたかい結合物なんだわ そうだわ ユーロンとコミーネンをよびにやらなくちゃ……彼らの前でわたしとバラオンの結婚をファンファーレよりもたからかに告げ知らせ それを聞いて絶望する者には一刻もはやい涙を そしてまたそれを聞いて祝意に頬をそめる者には一刻も早い笑いを用意させなくちゃ……」

この間に光急速に消滅する

闇の彼方へと消え去るウーザ

群唱団

「パンと肉で腹を重くみたす者たちは残酷だ……彼らはものうげな目でたがいのすきをうかがい 脂の汁でまだつるつるする唇を舌なめずる……

富める者よ……汝の牙が今しつかりとくいこんだ汝の隣人の首からすするのは どんな塩からい血か……どんな苦い水か……

おお 欲望というしまつの悪い極道息子に もっている財貨のすべてをを入れあげる馬鹿な養育者——人間よ」

群唱団の終結部に合唱団のハミングが重なりやがて合唱団の歌

「太陽は熱くたぎり

鳥は空をこいでいく

風は木の葉のうらに書きしるす……『愛』……『愛』

雨はやさしくおりてきて

大地をなで

頬をひやし

耳にささやく

「愛」……「愛」

愛こそ 世界……

愛こそ あなた……

苦悩の中心をじっとみつめる

光のジャスパール

合唱団の歌の終結部から光が復活し 管絃楽団の「苦悩をほめよ」が奏でられ それはやがて 群舞団の

「苦悶と栄光」のフォルムをよびさます

世界をつつむ群舞団の影

光ふたたび滅びはじめ

群舞団が闇の底にしずみ

管絃楽団の錯乱の美が宙をうずめる

闇のエーテルをくぐって 富める市民の群れが地上をうずめる

沈黙

突然 暗黒の空をひき裂く鳥の声……鳥の声の末尾に追いつがる男の狂声……

光パッとよみがえり 富める市民群の錯乱の像をまばゆく照らす

葡萄酒を鮮血のように浴び体中をぬらす男……パンを無気力に千切り捨てる女……銃で虚空の青を狙い撃つ男……犬を乳母車に乗せてうやうやしく進む女……地べたにひれ伏してただ祈りにふける男……狂ったように歌いつづける女……錯乱の踊りにあやつられる男……カードでギャンブルに耽る群れ……はてしな

い殺りくの技に我を忘れて没頭する群れ……その中心に立って読書に熱中する男……きらびやかな衣裳に
うっとりとして見とれて歩く女……

ウーザ ユーロンとコミーネンを伴って出現

ウーザ

「さあ わたしの市民たち……百億光年の彼方からふる命の栄光をよろこぶ群れよ——

わたしは今 とても激しい恋に熱中しています

さあ 祝ってください……市民達 まもなくバラオンというすばらしい若者と結婚しようとしているわたしの幸運を」

ユーロン

「(ウーザの前に立ちほだかり) えっ 恋だって……」

コミーネン

「(ウーザにとりすがり) えっ 結婚だって……」

ウーザ

「(二人を荒々しくつきのけ) お黙り 二人とも……富めるひとびとの代表としての名誉と誇りを 今 市民たちの前で失ってはいけないよ (前に進みでて) さあ わたしの市民たち……家畜小屋でまるまると肥えているすべての牛や豚の骨からなまあたたかい肉をはずして口に頬ばろう

わたしとバラオンの結婚を祝うため すべての瓶から強烈な匂いのする酒を引っこぬいて咽喉にながしこもう

わたしは愛している……愛している……愛しているわ バラオンという若者のすべてを……

歌え 踊れ 叫べ……わたしのよろこびは あなたの幸福のシャンデリアにともる百万燭光の電気！」

葡萄酒を浴びる男

「(熱狂して酒を頭にふりまきつつ) 万歳 ウーザ……ブラボー 独裁者……」

あなたが恋の酒を全身に浴びてうつくしく輝くように わたしも繁栄の葡萄酒を頭にふりまこう」

群唱団

「地は干せ 池は枯れ……苦しみのうちに干からびていく隣人がいる……というのに 利己心に目がくら

み おのれの快楽におごる者たちよ

だが 渴きにあえぐ隣人を見すてる者へのむくいは大きいぞ」

犬を乳母車にかくまう女

「この乳母車のなかの可愛い可愛い犬の名を たった今から『ウーザの恋』にするわ」

銃で虚空を射つ男

「(銃で虚空の青を射ち) 生け糞えだ……生け糞えだ……恋にようウーザの祭壇に血まみれの生け糞えをささ

げるのだ……」

群唱団

「ふしあわせな者たちをみすて 邪悪ならわしに溺れる者たちよ やがて劫罰の雨が天からどしゃ降る

時 どんな救いの箱船がおまえ達の岸边にうかぶというのか……」

ウーザ

「さあ わたしの市民たち……飲みほしなさい わたしの恋のよろこびを

オイルと鉄のさびつく大地にひれ伏して物質の神であるわたしを礼拝しなさい

さあ 歌いなさい……アル中患者のわななく唇で

さあ 踊りなさい……肥満病者のくさりやすい腿で

さあ まわしなさい……文明という名の自動車の残忍な車輪を

恋こそは勝利です 自己愛こそが神なのです

さあ 市民たち……わたしの恋する若者 バラオンを 今すぐ この場に連れてきておくれ……あの目に黒
水晶のうつくしい馬を飼っている神秘のバラオンを……」

ユーロン

「(前に躍りでて) ウーザ……やめなさい バラオンとかいう気ちがい犬と 富めるひとびと全体の運命とを
とつかえっこするようなゲームに 賢明なあなたがうつつをぬかすなんて信じられないことだ」

ウーザ

「お黙り……ユーロン 嫉妬に目がくらみ 前後の見さかしくもわたくしに刃向かうというゲームにあなたは
うつつをぬかしたいの(コミーネンの方をむき)

ねえコミーネン 富めるひとびとのもう一方の指導者よ……あなたは この愚かなユーロンと同じじゃあな
いでしようね だって あなたのひとびとは 今 ひどい干ばつで わたしのパンと肉と水なしには飢えか
わいてしまうかもしれない……という現実を決して忘れてはいないでしょうからね」

コミーネン

「(前にすすみでて) 勿論ウーザ われわれは あなたのパンと肉と水を買う必要にせまられてはいます

だが ウーザ……あなたは 今 バラオンとかいう あらゆる点で未経験な若者に あなたの権力のすべて
を委ねようとしているじゃありませんか

事態は急を要します……一刻も早く手をうたなければ われわれ富める者たちの一部までが じよじよに飢
餓線のしたに沈んでいかねばならないのです

ところが ウーザ……バラオンが この緊急事態にうまく対応して われわれの安全を保証する……という

確証を あなたはわれわれに与えているとはいえない

なぜ……なぜなら ウーザ あなたは 今 われわれにとっては ゆきずりの恋に狂う牝犬にすぎないから
です」

ウーザ

「(烈火の怒りに髪をふり乱し) お黙り コミーネン その愚かな言葉のむくいを受けるのは あなた自身
だ ということをよつくわきまえておくがいいわ」

コミーネン

「(動ぜず) ウーザ……盲目の魚となって恋の海の底ふかく沈むのは きっぱりとやめなさい

そして 迷妄の鮫があなたのすばらしい肉体と珠玉のような才能を噛みしだいてしまわないうちに われわ
れの立っていると同じ理性の渚へと逃れるがいいのだ」

ウーザ

「(激烈に) お黙り コミーネン……臆病な牧師さん だが わたしをあなたの信者だとかんちがいしての説
教はもうやめて

ああ 恋……この限らない自由のつばさで 苦悩の空たかく舞いあがろうとしているわたしの権利はだれに
も奪えないわ

さあ 市民たち……バラオンをよんできておくれ

たとい バラオン……あの若者がどんな破滅の招待状であろうとも わたしはそれを開いて読まなくちゃな
らないのよ」

群唱団

「おお 邪悪なバラオンが 気高いウンベルをひきたてて こっちにやってくるぞ……」

バラオン 重い金属の鎖にいましめられたエンベールをひきたてて出現

バラオン

「(ウーザに) さあ ウーザ……おれとあなたの結婚の引き出物をもってきたぞ

飢えている連中を食いものにするえせ予言者のはらわたがどんなに腐ってどろどろにとけているか……
を もし見たいなら こいつの腹を裂いてみるがいいのだ」

エンベール

「(頭をあげて昂然と) バラオンよ……あなたのそのうす薔薇色のきれいな舌を心にもないそしりだけがさな
いがいい

わたしは あなたに迫害されるひますらない 今 ここで こうして わたしとあなたが 無益な時をすご
している間にも 飢えたるひとびとが わななく手のひらを地べたにおしつけ やがて力つき 地に伏して
息絶えるのだ」

バラオン

「メシア気取りのかまとと奴 世界中がおまえの足元にひざまずくのを夢みる空想家奴 だが よく見るがい
い……鎖につながれ やがて豚のように屠殺されようとしているのは 断じておれ達なんぞじゃあなく エ
ンベール……まったくもっておまえなんだぞ」

エンベール

「さあ バラオン 今すぐ出発しようではないか 飢餓にあえぐやせ細った父親の手のひらにたった一かけら
のパンをおいてくるために……衰弱し切った母親の口に一滴のスープをそそいでくるために……」

バラオンよ……あなたにとって 今もつとも必要なもの——それはあなたの決断だ
正しからざる美食にふけり よこしまな怠惰に溺れる悪習をきっぱりと断ち切り あなたの籠にわかち合い

のパンをつめこんで さあ……でかけようではないか

これこそが あなたとわたしに課せられた唯一の道であり それに背く者はみずからの天に背く者としての罰をうけるであろう」

バラオン

「(嘲笑い) おつとどっこい……ところで今罰をうけようとしているのはどこのどいつなんだい……えっ 口だけは達者なインポテンツ野郎奴……ほら そのなによりの証拠には おまえの忠実な信者たちがひとり残らず寝がえりをうって、ちりぢりに逃げ去ったじゃあないか えっ そうだろう……奴らは命の永遠をとくお前よりは死の恐怖をとくおれの方を信じて逃げ去ったのだ」

ユンペール

「彼らをうとんじてはならない……彼らは今試練を受けているのだ その苦しみはやがていつかおおいなるよろこびとなってむくわれるであろう」

バラオン

「口へらずなおしゃべり乞食奴……おまえはどうしてもおれ達が不正で愚かで極悪だ——とこういいはるのだな」

ユンペール

「そうだ(葡萄酒を頭にそそぐ男にむき直り 鋭く) おお 葡萄酒を頭に注いでいるひとよ なんて勿体ないことをしているのだ あなたにとっては飲みあきた葡萄酒も 咽喉のかわいたひとびとにとっては命の水にひとしいのだよ

(パンを千切り捨てている女に) おお そこで大切なパンをいたずらに千切り捨てている女よ どうしてそのような無思慮なことをするのだ あなたにとっては食べあきたパンも飢えたひとびとにとってはかけがえ

のない命の救いなのだよ

さあ ひとびとよ むなしい行いにふけることをやめ 一かけらのパンを 空腹にもだえる隣人の口にささげなさい……

あなたたちの心は満ち潮にぬれた砂漠のように重くうるおい 体中をはればれとしたよろこびの風がめぐり 生きていることの充実感があなたの全身にみなぎるであろう」

葡萄酒を浴びる男

「ウンベール……このおれの 赤潮のように濁った血が おまえのいう通りにすればきれいになる……というのは本当か」

ウンベール

「葡萄酒を浴びる男よ……それは本当だ」

群唱団

「それは 本当だ」

パンを千切り捨てる女

「ウンベール……本当に わたしの この腐った肉体が もう一度よみがえりの光に浴びることができる……というのですか」

ウンベール

「パンを千切り捨てる女……それは本当だ」

群唱団

「それは……本当だ」

市民たち

「(いつせいにウンベールの方を向き 一歩進みでて) 生きるめあてを失って いたずらに遊びくらすわれらにも まだ 目をいきいきと輝かすに値する人生がのこされていた……というのは本当か」
ウンベール

「市民達よ それは本当だ」

群唱団

「それは 本当だ」

市民群 ユンベールの方に近づこうとする

ウーザ 狂気の髪をふり乱して ユンベールと市民群の間にたちふさがる

ウーザ

「だまされちゃいけないよ……あなた達 もしあなた達が この無責任な男の言葉に従えば あなた達は 今食べているパンを失い 街角で他人の捨てた食べのこしをあさり歩く この世でもっとも貧しいものになりさがるのだ」

ユーロン

「(ウーザのそばに走りより) ウーザ わたしが この偽善者ウンベールの舌をひっこぬき 眼球をくり抜いてやろうか」

ウーザ

「(激しく) ユーロン あなたはひっこんでいるがいいわ」

コミーネン

「(ユーロンと共にウーザのそばに立ち) ウーザ わたしこそ この大山師ウンベールの胸に手をつっこみ 心臓をつかんでひきちぎろうか」

ウーザ

「(いっ層激しく) コミーネン あなたの出番はまだよ(バラオンの方を向き)

さあ わたしの愛するバラオン……いよいよわたしとの結婚のしるしを 今ここで わたしにくださる時が
きたようね……」

バラオン

「(笑つて) 女奴……ついに肉食獣の本能をあらわしやがったな ふん あんたのその鉄よりも冷たい歯と歯
の間に ユンベールの血にまみれた生首をはさみこんでほしい……と こう おれにのぞんでいるのだな」

ウーザ

「そうよ バラオン……」

群唱団

「おお なんとおそろしいことか……みずからの息子に その子の父を殺せと命ずる母親の心根は――

だがウーザよ……おそれるがいい 女がふりまわす奸智の刃は いつか 汝じしんに切りつける裁きの刃と
なるであらう」

鳥の声けたたましく世界を襲う

光が急速に滅び 真紅や暗青色の不吉な光が地面をすばやくなめる

ウーザ コミーネン ユーロン……そしてすべての市民たち 恐怖の姿で地表に氷る(バラオンとユン

ベールを除き)

バラオン

「(逆光に黒こげの姿を宙にそびやかし) さあユンベール……死ぬがいい

もう この地上には おまえがしゃべるのに似つかわしい崇高な言葉など一かけらもなく おまえがなすに

ふさわしい自己犠牲など一滴ものこっちゃいないんだ

さあ ユンベール……一匹のゴキブリのように 首をちよん切られるがいい」

バラオン 鞭をふるって鎖をひきたてる

ユンベール

「(追いたてられつつも昂然と) ふしあわせな男バラオンよ……しかし 死もまた愛である

あなたが このわたしに死を授けてくれる……というのなら バラオンよ……わたしは よろこんで それを受けねばならない」

バラオン

「ええい……おしゃべりなゴキブリ奴……だがもうすぐ おまえのその舌をおとなしいスライスハムに変えてしまつてやるぞ」

ユンベール

「(大声で) わが命を奪うものは幸いなるかな……彼らは 貧しく飢えるひとびとへのわたしの愛を 価値ある遺産として受けつぐことになるであろう」

突然大音響が地底からわきあがる

世界が完全な暗黒におちる

金属が金属を殺し 鉱物が鉱物を破壊し 森林が森林をむさぼり ひとがひとを噛みくだく音楽が 巨大な恐怖の美学を建築する

やがて 音がしずまり 薄明の光がよみがえる

世界の中心にユンベールの首をのせた皿をささげて立つバラオン……

そのまわりを 悲しみに背を折り 腕を地にたれて踊る群舞団……

合唱団の美しくもむせび泣くハミング……

合唱団

「さらば 鳥よ

地はくらくよこれ

光は

空へとかえる

気高い者は

神へとかえる

死は祭り……

死は栄光……

死は光り……

さらば 鳥よ

光よみがえる

電光にうたれて我にかえるひとびと……

ウーザ バラオンへと走りよる

ウーザ

「(ユニベールの首を凝視し やがて手で目をおおい) おお これが かつてのわたしの夫ユニベールの首なの……わたしにかりそめの愛をささやいた舌——わたしに熱い接吻をした唇——わたしに慈愛のまなざしを注いだ目——」

バラオン

「さあ……よくみろ ウーザ これが おまえのかつての夫……おれの実の父であるウンベールの首だ」
 ウーザ

「(両手を目からパツとはなし 恐怖の目でバラオンを凝視し)

えっ バラオン……もう一度言つて……今の その おそろしい言葉を」

バラオン

「ああ なんどでも言おう……これこそ おれの実の父ウンベールの首」

ウーザ

「(恐怖の目をむき 両手で頬をかかえて後ずさりつつ) 実の父ウンベール……といったのね バラオン(後
 ずさりつつ 両手をバラオンの方へとのべ) おお バラオン……あなたは だれ……だれなの……」

バラオン

原 子 修

「(嘲笑つて) よく聞かがいい おれは あんたが あんたの子宮からひきずりだしてむごくも殺害した あ
 んたの子ども バラオンだ

あんたの力がよわく 胎児であるおれの肉体は殺したが 魂まではくびり殺さなかったため ここに こう
 して 復讐者の姿をしたおれがおまえの前に立っているのだ」

ウーザ

「(絶叫して) あーー」

ウーザ 狂った風のように走り去る

ユーロンとコミーネン 急いで追う

市民たち総立ちとなり うろたえ騒ぐ

群唱団

「殺すものは殺され 裁くものは裁かれる 飢えたるものをみすてるものは飢え 渴けるものを見殺しにするものは渴いて干せる

富めるものはやがて貧しくなり おごれるものははずかしめを受け ひとり占めするものはうばわれ……

人よ……滅びの時はもうすぐか」

バラオン ざわめく市民たちを制して立つ

バラオン

「(ウンベールの首を市民たちの方に向け) しずかにしなさい 市民たち……

二つの眼球をひらいて死んだウンベールの頬に かすかな微笑がうかんでいるのを……さあ しっかりと見届けなさい

実の息子であるおれによって殺されたこの男は しかし 最後まで 決しておれを憎もうとはしなかったのだ

(突然絶叫する) あーおれによって与えられる死をよるこんで受け入れた父よ (首に顔をうずめ) おれが 本当は父を愛していたことを ユンベール あなたは はじめから見ぬいていたのか

おお 最後までおれを許し 死によっておれの命をあがなってくれた父ウンベール (叫ぶように泣く) あ

あ 太陽系中に光をふりまいていたその太陽を撃ち殺してしまったこのおれに どんな光の慈愛がまだ残っている——というのか」

ユーロンとコミーネン 駆け戻る

ユーロン

「(あわてふためき) 聞け バラオン……おまえの母ウーザは われわれのひきとめる声と手をふり切り おそろしい速さで かつては彼女の支配下にあった 鉄とコンクリートとオイルの街を走りぬけると この世

の終末をかなでる自動車の車輪の下にみずからの肉体をなげだし ひき殺されて息たえたのだ」

コミーネン

「(おののきつつ) 血は薔薇のようにアスファルトに散り 肉は今世紀の鮮やかな夕焼けを地上にばらまいたが 骨はこなごなにうちくだかれ 魂は千切れてずたずたになり そのまま 宇宙のまっくらなはてへととび散ったのだ」

バラオン

「(首をのせた皿をたかく天にのべ) 父よ……母よ……あなたたちへの おれの非常に意識的な復讐が完成した瞬間 おれの人生がおれの内部で完結したのだ

おお鳥よ……今こそ おれの魂の枝におりてこい」

はげしく羽ばたく鳥のけたたましい声

暗黒が世界を奪い去る

鳥の声と羽音が全世界をおおい やがてじよじよにそれはしずまり それとともに光がよみがえる

バラオンのささげる皿からウンベールの首が消え去せている

市民たち

「(口々に) あっ バラオンの皿から ユンベールの首が消え去せたぞ」

バラオン(スピーカーからのウンベールの声で)

「(ウンベールと同じ口調で) 父親ウンベールの死は 息子バラオンの誕生であり 母親ウーザの死は 息子バラオンの成熟であり……やがて死ぬであろうバラオンの死は 全人類のよみがえりである

そして 今 ユンベールの首は バラオンの首であり ユンベールの貧しいひとびとへの愛は 今 バラオンの愛である

「さあ ひとつとよ……立ち上がって 今日飢えに苦しむもの達を救いに出発しようではないか」
ユーロン

「バラオン……貧しいもの達に近づくな 飢えているもの達の方に行ってはならない」

バラオン（ウンベールの声で）

「古い人類よ……わかち合うよりは奪い合い 愛し合うよりは憎しみ合うものよ だが 今こそ わたしは

新しい人類……奪うよりは与え 憎むよりは愛するものである

さあ 銃で虚空を狙い撃つ男よ……殺りくの武器にたよらず 心の平和をもつて力としようではないか

犬を乳母車にのせてあやす女よ……獣を愛する以上の熱烈さで 今日困っている隣人を愛そうではないか

ただ 祈り 歌い 踊り 話し 書くのみではなく このようにして 飢えるひとつとよとへと パンの籠を運

んでいこうではないか」

バラオン テーブルに歩みより 食物を手の皿にうつそうとする

コミーネン

「（手でバラオンをさえぎり）バラオン……その食べものを 野良犬のような貧乏人どものために盗みだすのはやめろ」

バラオン（ウンベールの声で）

「われらは食べあき 彼らはひもじい われらの食べものを彼らにわかつのは当然のことではないか」

コミーネン

「やめろ バラオン……無知な彼らは おまえの与える食べものによって 蛆蟲のように生き残り 子ども達をふやしていくだけなのだ」

バラオン（ウンベールの声で）

「なぜ 彼らが無知なのか……それは コミーネン あなたが彼らに文字を教えないからではないか

だが わたしは行こう……この食べ物を持たずさせて 彼らのもとにおもむこう……彼らの飢えをいやし 彼らの文盲の闇に灯をとますために わたしは行こう」

コミーネン

「(必死に) だめだ……バラオン ついさつきまではおれ達と同じ考えの軒下に立っていたお前が 今は急転直下 いかにも慈善家めいたことをずうずうしくしゃべりまくっているのをどうして許せようか」

バラオン (ウンベールの声で)

「わたしはバラオンであってバラオンではなく……ウンベールであってウンベールではなく わたしは今バラオンの姿をかりて地上にとまった鳥であるから……コミーネン あなたがわたしを阻止することは決してできないぞ」

コミーネン

「(怒り猛り) なんとでもいうがいい……バラオン だが おまえがおれ達の警告に従わない限り おまえは死ぬよりほかはなくなるのだ」

バラオン (ウンベールの声で)

「(皿に食べものを移しつつ) わたしが従うのは みずからの利益をしか求めないあなたからの警告ではなく すべてのものへの愛にかがやく天からの警告である (ふりむき) さあ 狂気の歌に全身をいましめられている女よ……ここにきて、このパンをもちなさい 錯乱の踊りに魂を売りわたした男よ……わたしのところにきて この魚をもちなさい

無価値なおこない……それは何千万と集めても決して光をはなつことはないが 価値あるおこない……それはたった一つでこの世をまばゆく照らす宝石なのだ

だから ひとびとよ……さあ 飢えに苦しむ隣人を救いに 今すぐ でかけようではないか」

市民たち バラオンの方に動きかける

ユーロン 走りでて バラオンと市民たちの間に立ちふさがる

ユーロン

「やめろ バラオン……めいめい勝手気ままに人生を楽しんでいる市民たちを コレラと殺人と貧困の世界に ひきずりこむのは 富める世界にとって 死に値する叛逆なんだぞ」

バラオン (ウンベールの声で)

「ユーロンよ……叛逆者はあなたの方ではないか

どうして あなたは 地上のすべてのひとが 互いに助けあい わかちあい 愛しあって生きることに対して するのか」

ユーロン

「だまれ……裏切り者奴 人殺し 詐欺師 ペテン野郎奴

もし貴様が一步でも 禁断の飢餓線をふみこえて あの飢えた蟲けら共の群れに近づこうものなら おれた ちの忠実な警察軍のライフル銃がいつせいに火をふくぞ」

バラオン (ウンベールの声で)

「あわれなユーロンよ……あなたは どうして 残忍な警察軍の数よりも わたしの言葉に従うひとびとの数 の多くなる日が もうすぐそこまで来ていることを信じないのか

警察軍のライフル銃がどんなにそのむごい鉄の銃弾で撃ち殺しても殺しても なお 飢餓線をふみこえて困 っている隣人にパンを運んでいく愛の証しびとが後をたたない……ということはどうして知らないのか」

バラオン 歩きだす

ユーロン

「とまれ バラオン……もう一步 そうだ もう一步おまえが飢餓線の方にすすんだら 警察軍の指がライフ
ル銃の引き金を正確にひくのだぞ」

バラオン（ウンベールの声で）

「愛ある限り……愛ある限り……わたしは進まねばならぬ……たとえ 愛にむくいるものが死であろうとも
……わたしは進まねばならぬ」

ユーロン

「（絶叫する）とまれ バラオン……動いたら撃つぞ」

沈黙

やがてバラオン ゆっくり歩みだす

数発の銃声……バラオン激しい衝撃をうけて全身がゆらぐが からくも立ちすくむ 市民たち 恐怖のあ
まり地に伏す

コミーネン

「（絶叫する）撃て……撃って撃って撃ちまくって……卑劣な寝返り者バラオンを 穴だらけの案山子にして
しまえ」

ふたたび数発の銃声

ふたたびバラオン激しくゆらぐが からくも立ちすくむ

光が衰弱しはじめ

美しい夕焼けがしずかに地上へと降りてくる

ユーロン

「殺せ……殺せ……この しぶとい馬を 屠殺場の庭にうち倒せ」

さらに数発の銃声……

ついにバラオンはどうと朽木のように地に倒れ伏し

光はいっ層衰弱し やがて夕焼けが夜の薄闇へとすすられていく

宇宙のなぎさを洗うさざ波のようにおこる合唱団のハミング……

群唱団

「バラオンは死んだ……おお 古い人類の支配者でありながら 鳥のするどい啓示に従って 新しい人類のための生け贖えとなった バラオンとその一族よ

父ユニベルと母ウーザの死をになつて生きた彼のあまりにも短い人生は終つた

だが 彼の死は 地の底ふかくまかれた種子である……それは やがて 富める者と貧しい者の悲しいすき間をうずめて繁る穀物のそよぎをうみだすであろう

バラオンは死んだ……しかし 彼の鳥は死ぬことがない

バラオンは死んで大地によこたわつたが 彼の鳥は生きのこつて あなたの空にあけぼのの改しゆんをよびつづけるのだ……今日も……そして明日も……」

鳥のかすかな羽音……はじめはかすかに やがてたかまり ついには偉大な魂の苦悶へとひろがり 管絃楽団のたからかな勝利の交響音に合唱団の歌がしずかにかさなり その間 群舞団がバラオンの死体を非常にゆつくりと運び去つて

幕

合唱団

「罪は ふりしきる夕焼け……」

大地をほぐし

夜は

かたい種子のように

闇をまく

だが

光は夜明けの雨か……

野を丘をはげしくくずして

芽をよび

命はまたもめざめる

おお

バラオン……

愛の苦しみよ」